

今月飛来の雁書がんしょに云はく、此の十月三日、母にて候もの十三年に相当たれり。錢二十貫文等云云。

夫外典三千余卷には忠孝の二字を骨とし、内典五千余卷には孝養を眼とせり。不孝の者それをば日月も光ををしみ、地神ちじんも瞋いかりをなすと見へて候。或経に云はく、六道の一切衆生仏前に参り集まりたりしに、仏、彼等が身の上の事を一々に問ひ給ひし中に、仏、地神に汝大地より重きものありやと問ひ給ひしかば、地神つつし敬んで申さく、大地より重き物候と申す。仏の曰く、いかに地神へんぼ偏頗をば申すぞ、此の三千大千世界の建立は皆大地の上にそなわれり。所謂須弥山しゅみせんの高さは十六万八千由旬、横は三百三十六万里なり、大海は縦横八万四千由旬ゆじゆんなり、其の外は一切衆生・草木等は皆大地の上にそなわれり。此を持てるが大地より重き物有らんや、と問ひ給ひしかば、地神答へて云はく、仏は知ろし食めしながら人に知らせんとて問ひ給ふか。我地神となること二十九劫なり。其の間、大地を頂戴して候に頸も腰も痛むことなし。虚空こくうを東西南北ちそうへ馳走するにも重きこと候はず。但不孝の者のすみ候所が身余にあまりて重く候なり。頸もいたく、腰もおれぬべく、膝もたゆく、足もひかれず、眼もくれ、魂もぬけべく候。あわれ此の人の住所の大地をばなげすてばやと思ふ心たびたび出来し候へば、不孝の者の住所は常に大地楯ゆり候なり。されば教主釈尊の御いとこ提婆達多だいばだつたと申せし人は閻浮提第一えんぶだいの上臈じょうろう、王種姓なり。然れども不孝の人なれば、我等彼の下の大地を持つことなくして、大地破れて無間地獄に入り給ひき。我等が力及ばざる故にて候と、かくの如く地神こまごまと仏に申し上げ候ひしかば、仏実はげにもげにもと合点せさせ給ひき。又仏歎いて云はく、我が滅後の衆生の不孝ならん事、提婆にも過ぎ、瞿伽利くがりにも超えたるべし等云云取意。涅槃經ねはんに、末代悪世に不孝の者は大地微塵よりも多く、孝養の者は爪上の土よりもすくなからんと云云。

今日蓮案じて云はく、此の経文は殊ことにさもやとをぼへ候。父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども、母の御恩の事、殊に心肝に染みて貴くをぼへ候。飛鳥の子をやしなひ、地を走る獣の子にせめられ候事、目もあてられず、魂もきえぬべくをぼへ候。其れにつきても母の御恩忘れがたし。胎内このつきに九月の間の苦しみ、腹つづみは鼓張のはれるが如く、頸は針をさげたるが如し。気いきは出ずるより外に入る事なく、色は枯れたる草の如し。臥せば腹もさけぬべし。坐すれば五体やすからず。かくの如くして産も既に近づきて、腰はやぶれてきれぬべく、眼はぬけて天に昇るかかたきとをぼゆ。かゝる敵かたきをうみ落としなば、大地にもふみつけ、腹をもさきて捨つべきぞかし。さはなくして、我が

苦を忍びて急ぎいだきあげて血をねぶり、不浄をすゝぎて胸にかきつけ、懐きかゝへて三箇年が間<sup>ねんごろ</sup>懇<sup>こん</sup>懇<sup>こく</sup>に養ふ。母の乳をのむ事<sup>こと</sup>一百八十斛三升五合なり。此の乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかへぬべし。されば乳一升のあたひを<sup>かんが</sup>検へて候へば、米に当たれば一万一千八百五十斛五升、稲には二万一千七百束<sup>そく</sup>に余り、布には三千三百七十段なり。何に況んや<sup>いか いわ</sup>一百八十斛三升五合のあたひをや。他人の物は<sup>こく</sup>銭の一文・米一合なりとも盗みぬれば<sup>半 巢 守</sup>ろうのすもりとなり候ぞかし。而るを親は十人の子をば養へども、子は一人の母を養ふことなし。あたゝかなる夫をば懐きて臥せども、<sup>凍</sup>こぶへたる母の足をあたゝむる女房はなし。給<sup>ぎつ</sup>弧<sup>こどくおん</sup>獨<sup>こんちよう</sup>園の金鳥は子の為に火に入り、<sup>きよう し か ぶ にん</sup>僑尸迦夫人は夫の為に父を殺す。仏の云はく、父母は常に子<sup>おも</sup>を念へども、子は父母を念はず等<sup>ようげん</sup>云云。影現王の云はく、父は子<sup>おも</sup>を念ふといえども、子は父を念はず等<sup>たと</sup>是なり。設ひ又今生には父母に孝養をいたす様なれども、後生のゆくへまで問ふ人はなし。母の生きてをはせしには、心には思はねども一月に一度、一年に一度は問ひしかども、死し給ひてより後は初七日より二七日乃至第三年までは人目の事なれば形の如く問ひ<sup>とぶら</sup>訪ひ候へども、十三年・四千余日が間の程はかきたえ問ふ人はなし。生きてをはせし時は一日片時のわかれをば千万日とこそ思はれしかども、十三年四千余日の程はつやつやをとづれなし。如何に<sup>開</sup>きかまほしくましますらん。夫外典の孝経には、唯今生の孝のみををしへて、後生のゆくへをしらず。身の病を<sup>癒</sup>いやして、心の歎きをやめざるが如し。内典五千余卷には人天・二乗の道に入れて、いまだ仏道へ引導する事なし。

夫目連尊者の父をば<sup>それ</sup>吉占師子、母をば<sup>し</sup>青提女と申せしなり。母死して後<sup>が き どう</sup>餓鬼道に墮ちたり。しかれども凡夫の間は知る事なし。証果の二乗となりて天眼を開きて見しかば、母餓鬼道に墮ちたりき。あらあさましやといふ計りもなし。餓鬼道に行きて飯を<sup>進</sup>まゐらせしかば、纔かに口に入るかと見えしが飯<sup>ぼか</sup>変じて炎となり、口はかなへの如く、飯は炭をおこせるが如し。身は<sup>とう こ</sup>灯炬の如くもえあがりしかば、神通を現じて水を出だして消す処に、水<sup>いよいよ</sup>変じて炎となり、<sup>彌</sup>火炎のごとくもゑあがる。目連、自力には叶はざる間、仏の御前に走り参り申してありしかば、十方の聖僧を供養し、其の生飯<sup>さば</sup>を取りて纔かに母の餓鬼道の苦をば救ひ給へる計りなり。釈迦仏は御誕生の後、七日と申せしに母の<sup>ま や ぶ にん</sup>摩耶夫人にをくれまいらせましましき。凡夫にてわたらせ給へば母の生処を知ろしめすことなし。三十の御年に仏にならせ給ひて、父<sup>じょうぼんのう</sup>浄飯王を現身に教化して証果の羅漢となし給ふ。母の御ためには、<sup>とうりてん</sup>忉利天に昇り給ひて、<sup>ま や</sup>摩耶経を説き給ひて、父母を阿羅漢となしまいらせ給ひぬ。此等をば爾前の経々の人々は孝養の二乗、孝養の仏とこそ思ひ候へども、立ち還つて見候へば、不孝の声聞、不孝の仏なり。目連尊者程の聖人が母を成仏の道に入れ給はず。釈迦仏程の大聖の、父母を二乗の道に入れ奉りて、永不成仏の

歎きを深くなさせまゐらせ給ひしをば、孝養とや申すべき、不孝とや云ふべき。而るに  
浄名居士じょうみょうこじ、目連そしを毀りて云はく、六師外道が弟子なり等云云。仏、自身を責めて云は  
く「我則ち慳貪けんどんに墮せん此の事は為さだめて不可なり」等云云。然らば目連は知らざれば科  
浅くもやあるらん。仏は法華經を知ろしめしながら、生きてをはする父に惜しみ、死し  
てまします母に再び値ひ奉りて説かせ給はざりしかば、大慳貪けんどんの人をばこれより外に尋  
ぬべからず。

つらつら事の心を案ずるに、仏は二百五十戒きんかいをも破り、十重禁戒をも犯し給ふ者なり。  
仏、法華經を説かせ給はずば、十方の一切衆生を不孝に墮し給ふ大科まぬかれがたし。  
故に天台大師此の事を宣べて云はく「過とがは則ち仏に属しなん」云云。有る人云はく「是  
十方三世の仏、本誓に違背し衆生を欺誑ぎおうすること有るなり」等云云。夫四十余年の大小  
・顯密の一切經並びに真言・華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律・浄土・禅宗等の  
仏・菩薩・二乗・梵釈・日月及び元祖等は、法華經に随ふ事なくば何なる孝養をなすと  
も、我則がそく墮慳貪だけんどんの科脱とがるべからず。故に仏、本願に趣いて法華經を説き給ひき。而るに  
法華經の御座には父母ましまさざりしかば、親の生まれてまします方便土と申す国へ贈  
り給ひて候なり。其の御言に云はく「而も彼の土に於て、仏の智慧を求め是の經を聞く  
ことを得ん」等云云。此の經文は智者ならん人々は心をとゞむべし。教主釈尊の父母の  
御ために説かせ給ひて候經文なり。此の法門は唯天台大師と申せし人計りこそ知りてを  
はし候ひけれ。其の外の諸宗の人々知らざる事なり。日蓮が心中に第一と思ふ法門なり。

父母に御孝養の意あらん人々は法華經を贈り給ふべし。教主釈尊の父母の御孝養には  
法華經を贈り給ひて候。日蓮が母存生してをはせしに、仰せ候ひし事をもあまりにそむ  
きまいらせて候ひしかば、今をくれまいらせて候があながちにくやしく覺へて候へば、  
一代聖教しょうぎょうを檢かんがへて母の孝養を仕らんと存じ候間、母の御訪とぶらひ申させ給ふ人々をば我  
が身の様に思ひまいらせ候へば、あまりにうれしく思ひまいらせ候間、あらあらかきつ  
けて申し候なり。定めて過去聖靈たちまも忽くえちに六道の垢穢を離れて靈山浄土へ御参り候ら  
ん。此の法門を知識に値はせ給ひて度々きかせ給ふべし。日本国に知る人すくなき法門  
にて候ぞ。くはしくは又々申すべく候。恐々謹言。

十月二十一日

日蓮花押

尾張刑部左衛門尉殿女房御返事